

海外で家づくり 形に残るボランティア

中央大学の国際ボランティアサークル「C-Habitat」は海外で家づくりの手伝いをする異色の団体。「誰もがきちんとした場所で暮らせる世界へ」を目指す活動を展開中だ。

学生記者 山田亮太郎(法学部3年)



フィリピンで家づくりをするメンバー。ヘルメットをかぶり、スコップを持つ。後方の家では子どもたちが作業を見ている
(写真提供=C-Habitat)

気温40度。インドの春。中大生有志が家を囲う壁を作るために奔走している。一輪車にレンガをたくさん入れて運ぶ。全身汗だくになりながら、数えきれないくらい行き来する。

次に、レンガを土台の上に一つ一つ積んでいく。作業で使うセメントも自分たちで、かき混ぜて作ったものだ。できあがった「壁」が現れた時、達成感で思わず笑みがこぼれる。自分たちの仕事は、現地の人のためになっている。目で見て実感できる瞬間だ。

喜びを分かち合う、お互いの顔はすっかり日に焼けている。国際ボランティアサークル「C-Habitat」の活動の一場面だ。

「C-Habitat」とは、「住まい」を専門とする国際NGOの日本支部である「ハビタット・フォー・ヒューマニティ・ジャパン」(以下、ハビタット)の中大学生支部だ。

2008年に設立され、現在は約80

人の学生が所属している。主な活動は、海外で「家」づくりをするGV(=Global Village)。GVプログラムは、家を必要とする「ホームオーナー」と現地を訪れたボランティアと一緒に家を建てていく活動だ。一方的な支援ではなく自立を促すために、ホームオーナーも汗を流す。

健全な住宅こそが生活の基盤になるとしてこの活動を続けている。2015年夏にフィリピン、2016年春にインド、同年夏に再びフィリピンで活動した。

思い出深いインドでのGV体験

今回、インタビューに応じてくれたのは、代表の横尾昂志さん(文3)と副代表の女子学生・赤羽響さん(法3)と男子学生・納栄夫さん(総政3)。彼の国籍は内モンゴルにあるが日本生まれだ。

3人は2016年春に2週間、インド

の南東部にあり、スリランカを遠くに見る都市・ポンディシェリーでGVプログラムに参加した。ハビタットは、現地のコーディネーターを紹介してくれるが、連絡などは学生が行う。コーディネーターとのやりとりは英語。ビザや航空券も自分たちで手配する。

支援前の住宅は、相当傷んでいて住めない状況だった。雨漏りがひどく、害虫も入ってくる。このような住宅に住んでいるホームオーナーと一緒に、丈夫で安心して住める家を作る。

午前6時に起床。朝食を済ませ準備を整え、ホテルを出発して、同9時には現場入り。建築作業員の指示に従って、レンガ運びやセメント作りなどに従事する。

昼食・休憩後。午後4時ごろまで作業を続けてホテルに戻る。帰ると毎日ヘトヘトだ。

疲れた体を癒してくれたのは、現地の人たちの優しさだった。子どもたちの前をトラクターで通ると彼らが駆け寄ってくる。サングラスをかけていた納栄夫さんは「クールグラス!」と呼ばれた。カッコいいと映ったようだ。「行く前は治安の面などに不安があったのですが、イメージが変わりました」と納栄夫さん。

GVプログラムの良いところは、ボランティア活動が「家」として、形に残ることだという。街頭募金などでは支援がどのように届くのが見えない。実際に現地へ行き、インドの人々やホームオーナーと一緒に働く。この作業を通して、自分たちの活動が支援につながっていると実感できる。



インドでの活動中、元気な子どもたちと記念撮影



昨秋の白門祭では模擬店「バナナ揚げちゃいました」を出店した

ポンディシェリーでの会話は「タミル語」。言葉を覚えておくことは、現地の人々とのコミュニケーションを円滑にし、建築作業もはかどる。「こんにちは」(タミル語でマラッカ)一つでも、「おお!知っているのか!」と心を開いてくれる。

こうした準備のために、C-HabitatではGV準備期間中、毎週GVミーティングを開催。言語係、歴史係、政治係、保健係…と分担を決め、調べてきたことを会内で発表し、共有する。

派遣先の国の言語、文化、政治、社会などを学ぶ。ミーティングを重ねることで、GVプログラムへのモチベーションが高まるという。

GVプログラムの活動は最大2週間。あっという間に時間が過ぎていった。家を作るという未体験の活動をしたことのみならず、現地の人と別れなくてはいけないことが寂しかった。

コーディネーターもメンバーが積

極的に活動しているのを見て、「いままでのグループの中で、三本の指に入るくらいよかった」と言ってくれた。終了後もGVプログラム活動中のことを思い出す日々だ。

一方で言葉を失う経験もした。作業後、滞在先に戻って海沿いを歩いているとき、物乞いに出会った。見たことがない光景に戸惑いながら、小さい子どもが「マネー、マネー」とせがむ姿に衝撃を覚えた。彼らにお金を渡すか、見解が分かれた。

渡した人は、自分のお金でその子が少しでも幸せになるのではと考えた。一方、渡さなかった人は、本当にその子のために使われるのか、という疑問がぬぐえなかった。難しい問題だ。

ボランティアの きっかけはさまざま

3人はなぜC-Habitatに参加した

のか。横尾さんは、大学に入ったらボランティア活動にかかわりたいと考え、いろいろなボランティアサークルを新歓期に見て回った。その中で、C-Habitatの活動に目が留まった。「団体だからこそできる活動がC-Habitatにあると思いました」と、彼はそう語った。

実際に海外に行き、住宅を建てる活動。そのスケールの大きさに魅力を感じたのだ。インドでの活動の他に、ネパールとインドネシアでのGVプログラム活動に参加した。

納栄夫さんは世界史が好きで資料集をよく読んでいた。貧困の子どもの写真などを見ているうちに、大学生になったら海外ボランティアに参加したいと考えるようになった。複数の大学に合格したが、高校教師と相談しながら中大総合政策学部の学びの領域に惹かれた。

総政では、上級生が下級生にアドバイスするSA(student advisor)制度がある。自身の担当になった先輩SAに「国際ボランティアのサークルに入りたいのですが」と相談したところ、まさにその先輩がC-Habitatに参加していた。

誘われて行ったミーティングで、活動内容が家を建てることだと知り、「凄い」と関心を寄せ、参加を決めた。

赤羽さんは、納栄夫さんの勧めで参加した。2人は同じ高校に通っていた。一人で参加することが不安だった彼が高校の同級生の何人かに声をかけたのだ。

彼女は、自分のことを「おっせかい」な性格だという。「自分のことよりも、他人のことのほうが頑張れるんです」。中学時代に行ったニュージーランドのホームステイで、まったく英語が話せなかった自分にショックを受け、語学の勉強を本格的に始めた。

高校生で米国に1年間留学、その時に培った英語力で高校生英語ディベートの全国大会に出場した経験をもつ。多くの国々に渡航した彼女だが、アジアには足を踏み入れたことがなかった。C-Habitatの支援先が主にアジアだったのが参加した理由の一つだ。

C-Habitatの 新たな挑戦

C-Habitatは「～and C-Habitat and...～」というスローガンを決めて、活動の幅を広げようとしている。ことしの春にスリランカとタイのGVプログラムに参加することを決めた。2カ国への同時派遣は、C-Habitat初の

試みだ。

GVプログラム以外の活動にも精力的に試みようとしている。その一環が、プロ野球観戦のチャリティーイベント。西武球団と株式会社シンミドウの共同企画で実現した。

プロ野球を500円で観戦ができるというイベントで、75人が参加した。収益はすべてタイでの建築活動への支援金として寄付された。熊本地震への募金活動も多摩センター駅前で行った。今後は、障害がある人との交流やC-Habitatの活動を広く伝えていくことを考えている。

こうした活動が他大学の団体の目に留まり、話を聞きたいという依頼が多くなっているという。「毎週のように依頼がきて、大変です」とうれしい悲鳴をあげる。

横尾さんは、「ぜひC-Habitatに興味をもってほしい」と語る。人数が多くなれば、できる活動の幅が広がるからだ。ボランティア活動に向けるC-Habitatの挑戦は続く。



幹部の3人、左から納栄夫さん、赤羽さん、横尾さん

飽きのこないインドカレー

現地での食事は、3食「カレー」だった。毎回違う味のカレーだったので、飽きがこなかったという。マイルド、中辛、辛口とあったが、マイルドでも日本人にとっては相当な辛さ。「インド人すげえー」と思ったとメンバーは驚いた。



メンバー表

横尾 昂志	三瓶杏沙美
納 栄 夫	関 千晶
赤羽 響	廣 拓磨
本間奈々里	瓜生 亜未
三井優太郎	永野 藍
松浦 聖和	小川 玲愛
佐藤紗矢子	町田 汐帆
高橋 聖矢	飯泉万理捺
仙田 真海	藤本 莉乃
荒木 莉紗	吉羽 周作
小出 秋穂	出淵 智衣
永井 崇史	鈴木 里佳
大西 美波	深谷 夏海
松本 理沙	永田 峻平
川井 洸輝	佐藤 快
関沼久瑠美	藤崎 直人
宮下 翼	永井 愛
東 鼓乃美	滝沢航太郎
諸岡 夏美	桑島 深姫
小宮 潮音	倉掛 萌
加藤慎太郎	野沢 麻湖
松本 悠里	嵯城 大輝
栗木 志穂	石垣 花織
山之内春渚	加藤 里菜
清川 絵夢	野中健太郎